

日本農業の今と国際耕種の関わり方

最終回：国際耕種の関わり方～始まりのためのエピローグ

本シリーズでは、国際耕種と関係のあった農業生産現場に関わる人たちの声を聞きながら、日本の農業が抱えている深刻な問題点や課題、たとえば、耕作放棄地、自給率低下、後継者不足等に対し、今後進むべき方向性や国際耕種の日本農業への関わり方や可能性などを探るために取材を重ねてきた。シリーズの最終回を迎えるに当たって、これまでの4つの取材事例を通して考えたことや、その後の活動および議論を通して得られた活動方針などを以下のような表にまとめてみた。

事例	シリーズの中で既に述べた活動方針	その後の活動や議論を通して新たに考えられた支援・協力
里美 (茨城)	有機野菜の定期購入、月例会への飛び入り参加、グループメールによる情報交換、交流会等のイベント開催、農家のネットワーク化を通じた資源循環型農業の促進	里美での有機農業を対象とした、大学等の研究機関との連携の下での、持続的な資源循環型農業システムをテーマとした調査研究活動への参画・協力
牛窓 (岡山)	若手就農者に対する農業研修の実施、新規就農希望者に対する宿泊施設や交流の場の提供支援、海外研修員や補完訓練生の受け入れのための斡旋業務	国際耕種のホームページ上に設定する情報交流の場を利用した牛窓グループの販売促進への貢献、他の有機農業者グループとの交流会等のイベント開催
甘楽 (群馬)	甘楽、牛窓、里美の有機農業者が情報を共有し、そこから共に学んで、将来的には連携して活動が出来るようになるための貢献	自然塾寺子屋で実施されている農村フィールドワーカー養成講座に直接間接に関与して、我々自身の農村調査手法の習得や我々の現地経験を研修の実施に生かすことでの貢献
浜松 (静岡)	農業ビジネス経営体の人材育成プログラムへの直接的貢献とそれを通じた生産性向上、耕作放棄地の活用、農地保全等への間接的貢献	有機農業者グループにとっても農業ビジネス経営体にとっても重要な要素となるマーケティング分野における情報共有のためのイベント開催等を通じた貢献

このシリーズも耕作放棄地の話題から始まったように、現在の日本農業の大きな問題点の一つは、農業者の高齢化や農産物価格の低位安定、後継者不足・就農者不足および耕作放棄地の増加、それらに起因する農村地域の活性低下がある。これらの点も考慮に入れながら、これまでの取材の中から国際耕種が今後関わっていく上で、いくつか重要なキーワードになりそうなことが挙げられる。一つには「モチはモチ屋」(第65号・浜松)ということ。つまり「作る」(農産物の生産)部分はすでに生産に関わっている人たちに任せて、国際耕種は営農に直接関わらないということが現実的な対応であろう。さらに、「作る」と「売る」との間でできることを探す(第65号・浜松)ということ。これは、戦後から近年までにおいて、本来は農協の役割であったことであるが、近年の商業の多様化で流通形態が変わってきている現実ではその肩代わりが求められている状況があり、そのためには新たな組織的対応も必要で、NPO設立等の動きが浜松や牛窓でも起きつつある。こうした動きに国際耕種がどう関与できるか、が一つの重要な課題である。

このような動きにも関連するが、もう一つの重要なキーワードは、「人材(後継者)育成」である。人材育成に関わる動きとしては、牛窓における後継者育成プログラム(第63号)、浜松の人材育成プログラム(第65号)に加えて、甘楽・自然塾のJOCV技術補完研修受入れ(第64号)等も今後農業に関わっていく人たを育成・支援しようとする動きである。また人材育成(後継者養成)の一つの手法として「技術研修」も考えられるが、こうした分野も含めた上での国際耕種の関与の可能性を探っていくことが今後の課題である。

このシリーズの中で、農協の本来の役割の肩代わりにつながるような、農家の組織化やビジネス化をめざすNPOも紹介した。国際耕種は海外での農業・農村開発において、現地NGOとの連携によって小規模ダム建設や家庭菜園プロジェクト等の支援を行ってきた。また、10年間携わってきた筑波での野菜栽培・稲・畑作物栽培技術研修で、帰国研修員達とのネットワーク構築によるフォローアップの重要性も認識してきた。国内における取り組みにおいても、キーワードとしては、「つなぐ」ことや「ネットワーク化」が重要であり、こうした連携やネットワークを活用していくことが有効と考えている。さらに、国際耕種がこれまで関わってきた国内外での研修や普及業務では、Face to Faceでの活動が重要であることも経験している。このように包括的且つユニークな経験をフルに活かして、今後とも日本の農業に深く関わっていきたい。